



Title	ハイデルベルクにのこる三木清の書簡
Author(s)	三谷, 研爾
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要. 2025, 2, p. 55-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100802
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ハイデルベルクにのこる三木清の書簡

三谷 研爾

キーワード：三木清、ハイデルベルク、留学、日独交流

はじめに

第一次世界大戦が終結し日独間の交流が回復した1920年以降、日本から多くの知識人がドイツ各地の大学に留学した。そのさいハイデルベルク大学が、とりわけ人文科学・社会科学分野の研究者の目的地として選好されたことは、つとに知られている¹。専門分野はそれぞれながら阿部次郎（哲学）、三木清（哲学）、九鬼周造（哲学）、羽仁五郎（歴史学）、恒藤恭（法学）、大内兵衛（経済学）、赤松要（経済学）といった錚々たる顔ぶれが、相前後してハイデルベルクに長期滞在した。これらハイデルベルク留学生を概観してみると、正規の学籍登録者から一時的な遊学の徒まで、また文部省などの官費ないし私学の独自財源による派遣からまったくの自己資金による滞在まで、個々のプロフィールにはかなりの差異がある。すでに高等教育機関に職を得ている場合もあればキャリア形成の途上の場合もあり、したがって留学時の年齢にそれなりの開きがあることも軽視できない²。

いったい彼ら洋行知識人はワイマール共和国期のハイデルベルクでなにを経験し、なにを持ち帰ってきたのか。この問題を考える格好の材料として、これまでもしばしば参照されてきたテキストのひとつに三木清の『読書遍歴』（1941）がある。これは表題が示すとおり、自身の読書経験を軸にして過去を振り返った自伝的エッセイで、幼少期の思い出にはじまりヨーロッパ留学に終わるその行路は、大正知識人の修業時代のありようを典型的に示すと同時に、三木自身の思想形成をヴィヴィッドに伝えている点で、きわめて重要な証言だ³。彼の留学は1922年5月から1925年10月までのおおむね3年半にわたり、その滞在先はハイデルベルクからマールブルクをへてパリへとうつりかわった。マールブルクでハイデガーの知遇を得て解釈学や存在論に目を開かれたこと、パリで『パンセ』に深く心を動かされ、のちに『パスカルに於ける人間の研究』に結実する執筆活動に専念したことは、三木の留学のよく知られたエピソードである。いずれにせよ『読書遍歴』はいまもって、当時の知識人の洋

行を考えるうえで基本となる重要なテキストのひとつといえよう。

他方、留学中の三木はかなり多くの手紙を書いている。ことに羽仁五郎宛のものは質量ともに分厚く、『読書遍歴』に劣らない重要性をもつ。ハイデルベルクにはじまったふたりの交遊は三木がマールブルクに移ったのち書簡中心となり、ネッカー河畔で日常的に語り合われていたであろう内容がそのまま手紙に残された⁴。それぞれの研究の進捗、教授たちの著作や授業への批評、日本での研究動向とそれに関連しての人事など、話題は多方面にわたり、その口吻は若い友人同士らしくすこぶる真率である。

わたしは2022年以来、ワイマール期の日本人留学者のハイデルベルク滞在について再検討をすすめてきた。ドイツに残存している資料をさらに掘り起こすことで、日本側の資料からだけでは見えてこない部分に光を当てるのがその眼目である。調査の結果、ハイデルベルク大学図書館が所蔵する当時の教授たちの遺稿・遺品のなかに、日本人留学者からのドイツ語書簡が含まれていることが確認された⁵。三木清についても、哲学講座の教授エルンスト・ホフマン Ernst Hoffmann (1880-1952) に宛てた手紙10通を検出できた。ホフマンは古代哲学を専門とする哲学史家で、ハイデルベルク時代の三木は新カント学派の領袖リッケルト Heinrich Rickert (1863-1936) の講義・演習とならんで、ホフマンの授業にも熱心に参加していたのである。

三木がヨーロッパ留学中に書いた手紙のうち既出のものは、『三木清全集』所収の45通、『岩波茂雄への手紙』所収の21通、『三木清研究資料集成』第1巻所収の3通である⁶。1925年5月6日付が重複掲載されていることを勘案すると、現存するのは今回新出の10通をくわえた合計78通と思われる。ホフマン宛書簡はすべて手書きなので、本稿ではまずそれらを翻刻したうえで訳出する。さらに岩波茂雄や羽仁五郎に宛てた書簡なども照合しながら、ホフマン宛書簡の位置づけについてすこしく解説をくわえたい。とはいえ本稿は、哲学者三木清の思想形成の過程についてあらたに論じることを企図するものではない。日本からやってきたひとりの若い知識人のドイツ滞在の実情にすこしでも近づくことが、ここでの目的である。

1. 三木のホフマン宛書簡 —— 翻刻と翻訳

上述のとおり、ハイデルベルクに残存するホフマン宛の書簡は10通ある。日付の最初のものは1923年11月、最後のものは1925年8月、発信地はマールブルクが4通、パリが6通である。以下はその翻刻ならびに試訳だが、ドイツ文中の下線は三木自身によるもので、訳出にさいし必要に応じて圈点を付す。また論文著者の補記を〔 〕内に示す。

（1）1923年11月14日、マールブルク

Marburg, den 14. Nov. 1923.

Sehr geehrter Herr Prof. Hoffmann !

Zu meinem grossen Bedauern konnte ich nicht bis jetzt Ihnen schreiben. Ich habe noch nicht die Nachricht von Herrn Iwanami, in Tokio, bekommen. Aber ich bin erfahren, dass sein Geschäft gänzlich verbrannt sei. Er selbst und die Leute, die bei ihm arbeiteten, sind gerettet. Sein Wohnhaus war sicher. Ich glaube dass er bald wieder sein Geschäft anfangen werde. Ich erwarte jeden Tag noch genaueren Nachrichten von ihm. Jedenfalls muss er sehr beschäftigt sein. Was Ihr Manuskript anbelangt, wollen Sie so gut sein, Herr Professor, noch einige Zeit zu warten? Sobald ich Bescheid weiss, werde ich Ihnen mitteilen.

In Marburg ist es still und ruhig. Ich höre hier Prof. Heidegger. Seine Aristotelesinterpretation ist eigenartig. Ich arbeite jetzt mit einem Schuler von ihm Aristoteles' Metaphysik zusammen.

Wie geht's Ihnen und Ihrer Frau? Ich hoffe dass ich bald wieder Ihnen schreiben könne,

Ihr

K. Miki

拝啓 ホフマン先生

たいへん残念ながら、これまでお便りできませんでした。東京の岩波氏からはまだ報告がありません。ですが、彼の社屋は全焼したと聞いています。氏本人と社員は無事です。氏の自宅も大丈夫でした。まもなく営業を再開するものと思います。わたしは毎日、彼からさらに詳しい報告が届くのを待っているところです。おそらく、忙殺されているにちがいません。先生の原稿につきましては、なおしばらくお待ちいただけますか。連絡が入りしだい、すぐにお知らせ申し上げます。

マールブルクはとても静かで落ち着いています。こちらではハイデガー教授の授業を聴いています。彼のアリストテレス解釈はユニークです。わたしは、彼の学生のひとりといっしょに、アリストテレスの形而上学を読んでいるところです。

先生ならびに奥様はいかがおすごしですか。近くまたお手紙を差し上げることができると思います。

敬具
三木清

(2) 1923年12月8日、マールブルク

Marburg, den 8. Dec., 1923.

Sehr geehrter Herrn[sic] Prof. Hoffmann !

Heute habe ich einen Brief von Herrn Iwanami bekommen. Er hat mir mitgeteilt, dass sein Geschäft jetzt wieder im Gang sei, dass die Zeitschrift „Shisō“ in kürzester Zeit wieder erscheine, dass Ihr Manuskript über Platons Idee des Guten im nächsten Heft verlegt werde. Ich hoffe dass ich bald das neue Heft der Zeitschrift empfangen werde. Wollen Sie so freundlich sein, mein geehrter Herr Professor, dass Sie Ihres [sic] Manuskript über Aristoteles zu mir nach Marburg schicken, damit ich am Anfang der Weihnachtsferien es übersetzen kann? Ich bitte auch dass Sie den Aufsatz über Platon und Kant schreiben würden. Ich möchte ihn auch rechtzeitig dem Verleger geben.

Hoffentlich geht es Ihnen und Ihrer Frau wohl. Mir geht's gut. Ich arbeite jetzt besonders Aristoteles. Ich vermisse vieles hier, aber doch ist es auch gut für mein Studium.

Mit herzlichen Grüßen,

Ihr

K. Miki

拝啓 ホフマン先生

きょう岩波氏からの手紙を落掌しました。それによると、営業は再開しており、雑誌『思想』は近々に復刊、プラトンの善のアイデアについての先生の原稿は次号に掲載される由です。まもなく同誌の新しい号を受け取れるものと思います。先生には、アリストテレス論の原稿をマールブルクのわたし宛にお送りいただけるのでしょうか。そうしていただくと、クリスマス休暇の早いうちに翻訳することができます。また、プラトンとカントについて論文をお書きくださいますようお願い申し上げます。それも早々に出版社に送りたいと思います。

先生と奥様にはお元気でおすごしください。わたしは元気しております。いまはとくにアリストテレスに取り組んでいます。こちらへきたことで逸したものは多々ありますが、それもまたわたしの研究にとっては良いことです。

敬具
三木清

(3) 1924年2月6日、マールブルク

Marburg, den 6. II, 1924.

Sehr geehrter Herr Professor!

Einlegend schicke ich Ihnen das Manuskript über Platon und Kant zurück. Meine Uebersetzung ist schon vor zehn Tage[n] nach Tokio abgegangen. Ich danke Ihnen nochmals für Ihren schönen Aufsatz im Namen des Verlegers und der japanischen Leser. Es freut mich sehr, dass Sie eine Abhandlung über das Problem der metaphysischen Kausalität bei Platon für uns schreiben werden. Wenn es Ihnen recht ist, möchte ich das Manuskript am Ende des Mai haben, damit es schon am Anfang des September erscheinen wird.

Ich arbeite Aristoteles noch. Diesmal will ich ihn ganz gründlich studieren. Ich möchte am Ende nächsten Monates Sie besuchen. Ich hoffe dass ich Sie und Ihre gnädige Frau gesund und glücklich wieder sehe. In Marburg ist es jetzt noch kalt und nass.

Ihr

K. Miki

拝啓 ホフマン先生

先生のプラトンとカントについての原稿を同封してお返しいたします。拙訳はすでに10日前に東京に送りました。発行人〔岩波茂雄〕ならびに日本の読者の名において原稿〔をいただいたこと〕にあらためて感謝を申し上げます。先生には、プラトンにおける形而上学的因果性の問題についての論考をわたしたちのためにご執筆いただけましたら、たいへんありがたいところです。よろしければ、その原稿を5月末に頂戴したく存じます。そうしますと9月初めには刊行されると思います。

わたしはあいかわらずアリストテレスに取り組んでいます。今回は徹底的に研究したいと思います。来月末にまたお目にかかります。先生と奥様がお元気でご機嫌よくおすごしのところにお会いできればさいわいです。マールブルクは今もじめじめした寒さです。

敬具
三木清

(4) 1924年7月24日、マールブルク

Marburg, den 24. Juli, 1924.

Sehr geehrter Herr Professor Hoffmann !

Ich bitte Sie um die Entschuldigung dass ich Ihnen so lange nicht geschrieben habe. Hoffentlich geht's Ihnen und Ihrer gnädigen Frau recht wohl. Bei mir gibt es nichts besonderes. Ich habe in diesem Semester Aristoteles studiert, vor allem seine Physik. Leider muss ich meinen Aufenthalt in Deutschland verkürzen, da ich einmal in Oxford zu studieren beabsichtige. Ich muss darum entsagen, in diesem Winter wieder nach Heidelberg zu Ihrem Kollege zu kommen. Ich bedauere es sehr. Ich werde am Ende August nach Paris abreisen, von woraus wieder nach England. Es wäre für mich äusserst glücklich, wenn ich Sie vor meiner Abreise noch einmal sehen konnte.

Ich habe das Honorar für Ihren Aufsatz über „Platon und Kant“ leider noch nicht von Herrn Verleger empfangen. Ich habe ihm darüber vor vierzehn Tage[n] geschrieben. Es tut mir wirklich leid, dass er die Sendung so verspätet hat. Vielleicht hat er es vergessen. Wenn ich das Geld noch in diesen Tage[n] von ihm nicht empfangen sollte, werde ich es Ihnen für ihn bezahlen. Wie geht mit Ihrem neuen Aufsatz? Wenn ich ihn noch vor meiner Abreise bekommen konnte, würde ich dafür sehr dankbar sein.

Mit herzlichsten Grüßen,

K. Miki

拝啓 ホフマン先生

長いあいだお手紙を差し上げなかったことをお許してください。先生と奥様にはお元気でございしのことと思います。わたしのほうは格別のことはございません。この学期はアリストテレス、とりわけ彼の自然学を研究しています。いちどオックスフォードで研究したいと思いますため、残念ながらドイツ滞在を短縮しなければなりません。ですので、この冬にハイデルベルクに戻って先生の授業に出ることは諦めざるをえません。たいへん残念です。8月末にはパリへ発ち、そこからさらにイギリスに向かいます。出発前にもういちど先生にお目にかかることができれば、このうえなく嬉しく思います。

玉稿「プラトンとカント」の謝金は、残念なことにまだ発行人から届いておりません。その件で、2週間まえに問い合わせの手紙を出しています。彼からの送金 that たいへん遅れていることを、まことに心苦しく思います。ことによると失念しているのかもしれませんが。近日中に送金が届かなければ、わたしが立て替えいたします。新しい論文のほうは、捗りはいか

がでしょうか。わたしの出発前に頂戴できれば、たいへんありがたく存じます。

敬具
三木清

(5) 1924年10月4日、パリ

Paris, den 4. Okt, 1924.

Sehr geehrter Professor Hoffmann !

Ich habe Ihnen lange nicht geschrieben. Seit dem Ende August bin ich hier. Ich musste mich erst in dieser Stadt orientieren. Ich musste mich auch für mein Studium vorbereiten, da ich jetzt die Absicht habe, in diesem Winter hier in Paris zu bleiben (meine Reise nach Oxford ist etwas verschoben). Ich möchte die französischen Philosophie und Kultur näher kennen lernen. Wenn das Semester beginnt, werde ich Sorbonne besuchen. Leider liest Bergson nicht mehr; es gebe gar nichts besonderes in der systematischen Philosophie. Aber im Gebiete der Geschichte der Philosophie hat vielleicht Sorbonne etwas zu sagen: Robin liest die Geschichte der antiken Philosophie, Gilson, die der mittelalterlichen, und Lévy=Bruhl hält sein Kolleg über die Geschichte der neueren Philosophie. Neulich hat Bréhier die Texte des Plotin mit seiner französischen Uebersetzung herausgegeben. Ich studiere jetzt das Buch.

Vor meiner Abreise vom[sic] Marburg habe ich Ihren Aufsatz über die metaphysischen[sic] Kausalität bei Platon übersetzt und nach Japan geschickt. Ich glaube dass ich ihn recht und gut übertragen habe. Der Aufsatz gefällt mir ausserordentlich. Nun schicke ich Ihr Manuskript wieder zurück und ich erwarte dass ich bald Ihren neuen Aufsatz bekommen könne.

Lassen Sie sich recht wohl gehen und grüssen Sie herzlichst Ihre gnädigen[sic] Frau. Ich erinnere mich immer meinen Aufenthalt in Deutschland mit Freude und Dankbarkeit zurück.

Ihr

K. Miki

Adresse: 26 rue Le Sueur, Paris

拜啓 ホフマン先生

ながらくお手紙を差し上げませんでした。8月末から当地にきております。まず最初は、この街に慣れないといけませんでした。いまはこの冬をパリですごす（オックスフォード行きはすこし延期です）つもりなので、研究の準備もすすめなければなりませんでした。フランスの哲学と文化をより身近に知りたいと思います。学期が始まれば、ソルボンヌへ行ってみるつもりです。残念ながらベルグソンはもう講義をしていません。体系哲学の分野ではこれというものはまったく見当たらないと聞きます。ですが哲学史のほうでは、ソルボンヌにはそれなりのものがありそうです。ロバンが古代哲学史を、ジルソンが中世哲学史を講じ、近代哲学の授業はレヴィ=ブリュールが担当しています。最近、ブレイエがフランス語訳付でプラトンのテキストを編集しました。いまわたしが研究しているのはその本です。

マールブルクを発つまえ、先生のプラトンにおける形而上学的因果性についての論文を翻訳し、日本に送りました。われながらよい訳になったと思います。この論文をことのほか愛読しております。原稿をお返しするとともに、また新しい論文を頂戴できることを心待ちにしています。

奥様にぜひともよろしくお伝えください。ドイツ滞在をいつも喜ばしく、またありがたく思い出しています。

敬具
三木清

(6) 1924年11月14日、パリ

Paris, den 14. Nov. 1924.

Sehr geehrter Herr Professor Hoffmann!

Sie sind vielleicht sehr beschäftigt mit Ihrem Kolleg und Seminar. Wie geht's Ihnen und Ihrer gnädigen Frau? Ich bin gewöhnt an dem Leben der Grossstadt; die französische Sprache macht jetzt nicht mehr grosse Schwierigkeit. Ich kann ruhig arbeiten. In diesen Tage[n] habe ich Robin's „la pensée grecque“ gelesen. Das Buch machte mir einen guten Eindruck. Haben Sie es angesehen?

Vor ungefähr einem Monate[sic] habe ich Ihnen Ihr Manuskript der Abhandlung über die metaphysische Kausalität bei Platon abgesandt. Haben Sie es empfangen? Und wie geht's mit Ihrem neuen Aufsatz? Ich hoffe dass ich ihn bald bekommen würde. Ich übersetze Ihren Aufsatz immer mit Freude.

Hier finde ich nicht so kalt wie in Deutschland. Jetzt fängt Paris' saison an. Le Salon

d'Automne ist geöffnet. Alle Theater sind voll. Schade dass der geschmacklose Amerikanismus auch in Paris herrscht !

Ich hoffe Ihnen grossen Erfolg in Ihrem Kolleg.

Mit herzlichsten Grüssen,

Ihr treuester

K. Miki

26. rue Le Sueur, Paris

拝啓 ホフマン先生

講義と演習でたいへんお忙しいことと拝察いたします。先生ならびに奥様にはいかがおすごしでしょうか。わたしのほうはこの大都会での生活に馴染んできました。いまはフランス語にそれほど苦勞しておりません。落ち着いて研究ができそうです。このところロバンの『ギリシャ思想』を読みすすめています。この本にはよい印象をもちました。先生はすでに目をおされたでしょうか。

おおよそ1か月まえ、先生のプラトンにおける形而上学的因果性の論文原稿をお返しいたしました。受け取られたでしょうか。また、新しい論文の捗りはいかがでしょうか。まもなく頂戴できればさいわいです。先生の論文を翻訳することは、わたしにとってはいつも喜びです。

こちらはドイツほど寒く感じません。パリの社交シーズンは始まったところです。サロン・ドートンヌも開幕しております。劇場はどこも満席です。パリでも無粋なアメリカニズムが席卷しているのは残念です！

ご講義に多くの学生が集まることをお祈り申し上げます。

敬具

三木清

(7) 1924年11月30日、パリ

Paris, den 30. Nov. 1924.

Sehr geehrter Herr Professor Hoffmann !

Mit besten[sic] Dank bestätige ich den Empfang der Korrekturbogen Ihres Buches. Ich habe sie sorgfältig durchgelesen; ich habe dabei sehr viel gelernt. Ich zweifle daran nicht, dass Ihr Buch einen erfreulichen Eindruck in der Welt machen wird. Nach Ihrem

freundlichen Vorschläge übersetze ich von ihm das erste Kapitel. Ich werde in einigen Tage[n] mit meiner Uebertragung fertig sein.

Robins La pensée grecque ist bei „La Renaissance du Livre“ in Paris (78, Boulevard Saint-Michel) erschienen. Ich werde Ihnen in kurzem ein Exemplar schicken; Sie brauchen also nicht es zu bestellen.

Wenn Sie später mich noch etwas übersetzen lassen wollen, so werde ich es immer mit Freude tun. In Betreffs Ihres Aufsatzes über Platonismus und Mittelalter, werde ich sehr dankbar sein, wenn Sie ihn im Laufe des Januars des nächsten Jahres vollenden würden.

Ich grüsse herzlichst auch Ihre gnädigen[sic] Frau.

Ihr ergebener

K. Miki

拝啓 ホフマン先生

ご著書の校正稿、たしかにありがたく頂戴いたしました。こまかく拝読し、おおいに学ばせていただきました。ご高著はまちがいなく世の好評を博するものと思います。懇切なご提案にしたがいその第1章を翻訳しております。翻訳は数日中に仕上げるつもりです。

ロバンの『ギリシア思想』はパリのルネサンス・ド・リーブル社（サン・ミシェル大通り78番地）から刊行されました。近々、先生に一冊お送りしますので、ご注文になるには及びません。

今後さらに翻訳させていただくものがありましたら、いつでも喜んでいたします。プラトニズムと中世についてのご論考に関しましては、来年1月中旬に仕上げさせていただきますとたいへんありがたいところです。

奥様にくれぐれもよろしくお伝えください。

敬具

三木清

(8) 1925年3月4日、パリ

Paris, den 4. III. 25.

Sehr geehrter Herr Prof. Hoffmann!

Einlegend schicke ich Ihnen einen Scheck, den ich von Herrn Iwanami erhalten habe

für das Honorar Ihres Aufsatzes. Ich hoffe dass ich bald die Fortsetzung Ihrer Arbeit über die Sprache und die archaische Logik bekommen könne. Ich werde daraus ein oder das andere Kapitel übersetzen.

Hier haben wir keine Kälte. Schon fühlt man die Nähe des Frühlings. Wie geht's Ihnen und Ihrer gnädigen Frau? Leider kann ich nicht jetzt nach Griechenland abreisen, da ich zur Zeit eine Abhandlung über Blaise Pascal schreibe. Seine wunderbaren Pensées haben mir einen grossen Eindruck gemacht.

Mit herzlichen Grüßen,

Ihr ergebenster

K. Miki

拝啓 ホフマン先生

原稿謝金として岩波氏から受け取った小切手を同封してお送りいたします。まもなく言語と古代の論理についてのお仕事の続きを頂戴できればと思います。そこからひとつかふたつの章を訳出するつもりです。

こちらは寒くはありません。もう春が近いことが感じられます。先生と奥様はいかがおすごでしょうか。残念ながら、いまギリシャ旅行に出ることはできません。目下のところブレーズ・パスカルについての論文を執筆しているところです。彼の驚くべきパンセから強い印象を受けております。

敬具

三木清

(9) 1925年3月27日、パリ

Paris, den 27. III, '25.

Sehr geehrter Herr Professor Hoffmann!

Ich danke Ihnen herzlichst für Ihre schönen[sic] Gabe; „die Sprache und die archaische Logik“ habe ich vor zwei Woche[n] von Ihrem Verleger empfangen. Ich hatte leider nicht die Zeit, Ihre Arbeit sogleich zu lesen. Ich war sehr beschäftigt mit meiner Arbeit über Pascal. Jetzt bin ich frei, fange ich an Ihr Buch zu studieren. Ich werde vielleicht ein oder zwei Kapitel daraus übersetzen.

Ihren Aufsatz über Platonismus und Mittelalter möchte ich auch haben, wenn es nur

Ihnen gefällt. Ich werde meine Uebertragung eingeteilt erscheinen lassen, wenn sie zu grossen Umfang haben sollte. Ich bitte Sie also darum, mein geehrter Herr Professor, dass Sie so freundlich sein, Ihren Aufsatz zu mir zu schicken, sobald Sie mit ihm fertig sind.

Ich grüsse Sie herzlich[sic] und bleibe immer treu,

Ihr

K. Miki

拝啓 ホフマン先生

先生のご惠贈に心から御礼申し上げます。2週間まえ、『言語と古代の論理』を出版社から頂戴したところです。残念ながらすぐにご高著を読む時間はありませんでした。パスカル論に追われておりました。いまは手すきになり、ご著書を読みはじめております。なかのひとつかふたつの章を翻訳するかもしれません。

よろしければ、プラトニズムと中世についての論文も頂戴したいと思います。あまりに大部になるようなら、翻訳を分載にしてもらつつもりです。ですので、論文が仕上がりましたらお送りくださいますよう、お願い申し上げます。

敬具

三木清

(10) 1925年8月13日、パリ

Paris, den 13. Aug. 1925.

Sehr geehrter Herr Professor !

Ich danke Ihnen herzlichst für die Sendung der zweiten Hälfte Ihrer Abhandlung. Ich werde daraus einen Auszug machen wie es bei der ersten Hälfte derselben der Fall war. Leider muss ich Ihnen bekennen dass ich meine Uebersetzungsarbeit nicht sofort anfangen kann. Meine Arbeit über Pascal liegt noch unvollendet vor. Und diese Arbeit möchte ich zunächst zu Ende bringen. Aber sie soll nicht lange dauern. Ich denke doch wohl dass ich Ihren Aufsatz im September übersetzen kann. Den Auszug aus dem ersten Teil desselben habe ich noch nicht zum Druck gesandt, da ich ihn mit dem zweiten einheitlich bearbeiten wollte. Wenn die Druckbogen inzwischen Ihnen nötig sein sollten, so wollen Sie, Herr Professor, mir freundlich darüber schreiben?

Ich wünsche Ihnen und Ihrer gnädigen Frau die glücklichsten Ferien.

Ihr ergebenster

K. Miki

拝啓 ホフマン先生

論文後半をお送りいただき、心からお礼を申し上げます。前半と同じく、抄訳を作るつもりです。残念ながら、いまずぐ翻訳に着手することができない点、申し上げておかねばなりません。パスカル論がまだ終わっていないのです。ですので、まずそちらを仕上げたいと思います。とはいえ長くはかからないはずで、9月になれば先生の論文の翻訳に取りかかれるでしょう。論文前半の抄訳は、まだ「日本へ」送付しておりません。後半と合わせてひとつにしたいと思います。校正稿がご入用ということになりましたら、その旨をお知らせいただけますでしょうか。

先生と奥様にはよい休暇をおすごしください。

敬具

三木清

2. 古代・中世哲学史の専門家ホフマン

書簡の相手であるホフマンについて確認しておこう⁷。1880年生まれのホフマンはベルリン、ゲッティンゲン、ハイデルベルクで古典文献学と哲学を修め、アリストテレス研究によってベルリン大学で学位を得た。長くギムナジウムの教員を務めたのち、教授としてハイデルベルク大学に呼ばれたのは1922年、42歳のときである。この時期のホフマンの主たる研究テーマはプラトン哲学だったが、ハイデルベルク在任中にさらに中世におけるプラトニズムや神秘主義思想へと研究対象を拡げ、またクザヌスの文献学的研究にも着手して、今世紀に入ってようやく完結をみた校訂版クザヌス全集の基礎を築いた。だがヒトラー政権成立後の1935年、ユダヤ系と認定されたホフマンは大学を去ることを余儀なくされ、教壇へ復帰したのは戦後になってからである。彼は、ヴィンデルバントやリッケルトのように理論体系の構築をめざす哲学者ではなく、文献学的研究に通じた堅実な哲学史家であった。

当時の講義要覧をみると、ホフマンがハイデルベルクで授業を開始したのは1922年夏学期である⁸。この学期の哲学講座では、リッケルトが哲学担当の正教授、ヤスパースが心理学担当の正教授を務める一方、ホフマンは哲学の正教授と同時に教育学の員外教授を兼ねていた。講義でプラトニズムを取り上げ、演習でアリストテレスを読む彼の授業は、はじめて大学に迎えられた新任教員らしく意欲的なものだったにちがいない。そして同年6月にハイデルベルクに到着した三木は、着任して日も浅いホフマンの授業に参加したのである。

翌 1923 年 5 月 16 日、三木は岩波茂雄に宛てて「この Hoffmann 教授は Platon の研究家として独逸第一であらうと云ふ噂がありますが、私はこの人からこの方面に於いて色々多くのことを学びました」⁹と書いている。『読書遍歴』によると、旧制高校時代から新カント派関連の本を多く読んできた三木がハイデルベルクを留学先に選んだのは、なによりまずリッケルトの指導を受けるためだった。だがじっさいにリッケルトの授業に接した印象を、「私は教授の著書はすでに全部読んでみたので、その講義からはあまり新しいものは得られなかつたが、この老教授の風貌に接することは哲学といふものの伝統に接することのやうに思われて楽しかつた」と回想している¹⁰。他方、京大時代の恩師のひとり羽多野精一は三木にむかって、西洋哲学を研究するにはギリシャ哲学およびキリスト教を学ばなければならないと説いていた。

その影響で私はギリシア語の勉強を始め、辞書と首引きでプラトンを讀んだり、またキリスト教の文献に注意するやうになつた。これまでの自分を振り返つてみると、私は考へ方の上では西田先生の影響を最も強く受け、研究の方向においては波多野先生の影響を最も多く受けてゐることになるやうに思う。私の勉強が歴史哲学を中心とするやうになつたこと、あるいはアリストテレスなどの研究に興味をもつやうになつたこと、またパスカルなどについて書くやうになつたことは、その遠い原因は波多野先生の感化にあるといへるであらう¹¹。

三木がホフマンの授業に参加した背景に、羽多野から受けた指導があつたことはまちがいない。先の 5 月 16 日付書簡でも、若手研究者ふたりにギリシャ語の個人指導を頼み、毎週 8 時間のレッスンを受けるほど集中的に取り組んでいるとある。この年の秋、彼はマールブルク大学に移ってハイデガーと邂逅するのだが、残っている手紙から判断するかぎり、当初はまずなにより同地の中心的存在ハルトマン Nicolai Hartmann (1882-1950) の指導を受けることが目的であり、あわせてフライブルクから転任してきたばかりのハイデガーの授業にも参加する心づもりだったようだ¹²。ハイデガーは冬学期の演習でさっそくアリストテレスを取り上げることを予告しており、三木はホフマンのもとで学んだ古代哲学の知識が活きたと考えたことだろう。そして実際には、ハルトマンの授業が期待外れだったのにたいし、ハイデガーの授業はアリストテレス解釈のユニークさにおいて予想を大きく上回るものだった¹³。マールブルク滞在中の三木は、ハイデガーの授業と並行してアリストテレスのギリシャ語テキストを読みすすめるだけでなく訳出を試み、さらにアウグスティヌスの『告白』のラテン語原典に取り組んでいる。後年の述懐だけを読むと、彼のマールブルク転学はハイデガーの指導を受けることが主眼だったようにみえる。とはいえ羽多野やホフマンの指導を機縁に、

古代哲学や中世思想について自在かつ徹底した読書に没頭する毎日が、三木のヨーロッパ留学の基調だったのである。

3. 編集者としての三木

今回新出のホフマン宛書簡は、かなりの部分が岩波書店の月刊誌『思想』に掲載される翻訳原稿についての連絡で、それ以外は三木の近況報告である。その意味では多分にビジネスレター的な性格をおびた書簡群なのだが、背景となる経緯を『読書遍歴』はつぎのように伝える。

ハイデルベルクの教授でその講義を聴いたのは、リッケルトのほかエルンスト・ホフマン教授である。[…] ホフマン教授はディールスの弟子で、プラトン研究者として知られてゐた。私はホフマン教授の論文を訳して『思想』に載せたことがある。当時ドイツのインテリゲンチヤはインフレーションのために生活が窮迫してゐたので、いくらかでも原稿料が入れば宜からうと思つて、私はその論文を教授に依頼したのであつた¹⁴。

三木にいわせると、第一次世界大戦後の混乱で困窮しているドイツの学者への経済支援の意味あい、論文の翻訳と雑誌掲載を提案したという。だが、1923年5月16日の岩波茂雄宛書簡はすこし違うニュアンスをおびている。というのも三木のヨーロッパ留学は、そもそも羽多野精一の推輓によって岩波が資金を提供したものだ。三木にはそのぶん、最新のヨーロッパ学術情報を伝えるなど、岩波書店の事業に間接的に寄与することが期待されていたと推察される。同書簡中の、「翻訳権のこと、「思想」の原稿のことなど心得てゐまして、適当なものがございましたら貰ひ受けることにいたします」の一文は¹⁵、三木のホフマンにたいする提案が岩波からの暗黙の期待に応えるものでもあったことを含意している。また岩波から三木に翻訳料が支払われていることからして、留学生三木にとって格好の副収入となつたのもまちがいない¹⁶。

しかし他方、マールブルクからパリへ移つたのち三木は羽仁五郎につぎのように書いている。

ホフマンが „Metaphysische Kausalität bei Platon“ と云ふ論文を寄越したので、[パリ行きの] 荷造りの準備の中で譯して『思想』へ送つた。[…] 私は全く無駄に譯してゐるかも知れないけれど、私はホフマンと云ふ人物が好きだからこの面倒をしてゐる。ホフマン夫妻は来春ギリシア旅行をすると云ふので、私は彼地で再會することを期して別れた¹⁷。

ホフマンはギムナジウム教師の経歴が長かつただけに教育熱心で、自他ともに認める「校長

先生 Schulmeister」タイプの学者だった¹⁸。枢密顧問官の称号を有する名望家的存在でもあったリッケルトとは肌合いの異なる地道な学者だったようである。三木がホフマンの論文の翻訳にかなり力を注いだ背景には、そうした彼の人となりへの敬愛があったことはたしかだ。

三木は1923年夏学期でハイデルベルク滞在を切り上げ、同年冬学期からマールブルクに移ったが、その転学手続や転居準備のさなかの9月1日、関東大震災が発生してドイツの新聞各紙も大きく伝えた。岩波書店の社屋焼失という一報は三木を愕然とさせる。進行中のホフマン論文の翻訳は『思想』に掲載を予定していたし、なにより彼の留学したい岩波の肝煎りだったからだ。ホフマン宛の書簡がいきなり岩波書店被災の話題ではじまるのは、そうした事情あってのことである。だが、さいわい自宅の損壊を免れた岩波はそこを拠点にして事業再開に奔走し、『思想』も1か月の休刊だけで乗り切った。そして同誌1923年12月号での「プラトンの教説に於ける善のはたらき」の掲載を皮切りに、つづく2年あまりのうちにホフマンの論文5篇が三木の手で翻訳紹介されていく。

じっさいホフマン宛と岩波茂雄宛の書簡を照らし合わせてみると、そこから浮かび上がる三木の姿は、原稿の依頼や督促、その訳出、雑誌掲載までの進捗報告や謝金金額とその支払いの段取り、原稿の返却と次作の依頼などの業務を一手に引き受ける翻訳者と実務者を兼ねたものだ。翻訳掲載が完了するとただちに次作の寄稿を懇請するさまは、あたかもホフマン担当の岩波書店編集部員のようなものである。三木の周旋・翻訳によって『思想』に掲載されたホフマンの論文は、さきの「プラトンの教説に於ける善のはたらき」以外に、「プラトンとカント」(1924年4月号[カント記念号])、「アリストテレスの教説に於ける神の存在」(1924年5月号)、「プラトンに於ける形而上学的因果性」(1924年11月号)、「ロゴスとエポス」(1925年3月号)である¹⁹。ドイツの学界の第一線で活躍する専門家が、それまで『思想』の誌面では手薄だったギリシャ哲学について本格的論考を寄せてくれたわけで、三木の働きは誌面充実という点で岩波をおおいに喜ばせただろう。ことに「プラトンとカント」は、『思想』のカント特集のための書き下ろしだから、そもそも三木からのアプローチがなければ成立しなかった論考である。

『思想』は月刊誌としての性格上、論文の内容のみならず分量的制約もあったはずで、翻訳権の確認作業とあわせ、三木のメディエーターとしての役割は相当のものだったとみてまちがいない。彼がそうした周旋に尽力しているさまは、たとえば1924年2月3日付の岩波宛書簡にはっきり窺われる。

同教授[ホフマン]の論文は「思想」の読者に多少とも反響があるやうでございませうか。若しさうでありましたら、更に同教授に依頼して新しい論文を書いて貰はうかとも思いますが如何でありませう。私の翻訳に就きましても御注意下さることがございませう。

たら、遠慮なくお申越し下さい²⁰。

その3日後の2月6日付のホフマン宛書簡で「発行人ならびに日本の読者の名において」寄稿に謝意を表した三木は、現地駐在の編集者以外のなにものでもない。留学から帰国した彼が、さまざまな出版企画に参画してアカデミズムとジャーナリズムを架橋する役割をはたしたことはよく知られているが、ホフマン宛書簡群は早くもその片鱗を示しているといっていだらう。

*

1924年8月末、三木はマールブルクからパリへ移った。しばらくパリに滞在してからさらにオックスフォードに移るのが当初の計画だったが、この渡英はけっきょく実現しなかった。フランス語会話の個人レッスンを受けながらフランス語哲学書のページを繰る毎日を送るうち『パンセ』に出会った彼は、パスカル研究に打ち込みはじめる。のちに『パスカルに於ける人間の研究』となる諸論文の進捗状況は、1925年1月初めに田辺元宛書簡で言及されたのち、羽仁五郎にはそのつどかなり詳しく報告された。同年3月のホフマン宛書簡にも執筆中のパスカル論について簡単な言及があり、三木が翻訳の仕事をすっかり封印し、論文執筆に専念していたことがうかがわれる。ギリシャを旅行して、ホフマン夫妻と現地で合流するという夢のような計画が果たされることは、むろんなかったわけである。

1925年8月14日、三木は岩波に「パスカルの方法」についての論文原稿を送付したことを知らせ、さらに「他の論文も大体草稿が出来てゐます」と書き添えた。「他の論文」とは『パスカルに於ける人間の研究』の第6論文「宗教における生の解釈」を指すと思われる。しかしその前日の8月13日付ホフマン宛書簡は、パスカル論はまだ執筆途中と伝えている。じっさい三木が同論文を最終的に完成させたのは帰国後であり、ホフマンの中世プラトニズム研究が『思想』で紹介されることはついになかった²¹。しかもこの8月13日付書簡はハイデルベルクに残存するホフマン宛書簡の最後のものである。三木は同年10月に日本に帰着しているため、これらの手紙が書かれた8月中旬はもはや帰国直前だった。彼が帰国後、ひきつづきホフマンとのあいだで書信を交わしたかどうかはわからない。だが、こと翻訳にかんするかぎり、1920年代から1930年にかけて三木の訳業がコーエンやシェーラー、さらにはマルクス／エンゲルスへすすんでいったことを考えあわせると、中世プラトニズム研究の紹介に立ち戻る可能性は低かっただろう。他方、その編集者的ないしメディエーター的な側面は、岩波書店との緊密な結びつきをとおしていっそう強められ、彼の活動の重要なエレメントになっていったのである。

*本稿は科研費による国際共同研究（22KK0004）の成果の一部である。ハイデルベルク大学所蔵資料の入手にあたり、ご協力いただいた同大学日本学科のハンス=マルティン・クレマ教授に深く感謝する。

- 1 代表的な先行研究には、生松敬三『ハイデルベルク ある大学都市の精神史』、TBSブリタニカ 1980年；Seifert, Wolfgang (hg.): *Japanische Studenten in Heidelberg. Ein Aspekt der deutsch-japanischen Wissenschaftsbeziehungen in den 1920er Jahren*. Heidelberg: Verlag Regionalkultur 2013. などがある。また Mitani, Kenji: *Japanische Intellektuellen am Neckar. Zu ihrem Heidelberger Studium in den 1920er Jahren*. In: *Dokubun gakuho* [『独文学報』], Bd. 39 (2023), S. 7-21. も参照されたい。
- 2 ワイマール共和国期を通じてのハイデルベルク大学への日本人留学生の動向については、久野譲太郎が学籍簿などの悉皆調査をすすめている。久野「ヴァイマール期ハイデルベルク大学への日本からの留学状況とその歴史的背景」、*Bunron. Zeitschrift für literaturwissenschaftliche Japanforschung*. Nr. 8 (2021), S. 230-274. を参照。久野はこの論文をさらに補訂し『ヴァイマール期ハイデルベルク大学の日本人留学生：在籍者名簿および現存資料目録』（科研費成果報告書、2022）にまとめている。
- 3 三木清『読書遍歴』、『三木清全集』第1巻、岩波書店 1966年 369-432 ページ。
- 4 留学中の三木の羽仁五郎宛書簡は『三木清全集』第19巻、岩波書店 1968年、222-309 ページを参照。なお当時の羽仁は森姓である。
- 5 差出人は大峽秀栄、大江清一（精志郎）、松永材などである。また留学生者ではないが、西田幾多郎からの書簡も残存しており、これについてはすでに縄田雄二がその存在を報告している。縄田雄二「マールバッハとハイデルベルクに見出された日独交流資料—森鷗外・西田幾多郎・山本有三」、『文学』第12巻6号（2011）、岩波書店、171-195 ページ参照。さらに、縄田「西田幾多郎のエルンスト・ホフマン宛ドイツ語書簡」、『点から線へ』第59号（2012）、石川県西田幾多郎記念哲学館、124-132 ページも参照。
- 6 『三木清全集』第19巻、岩波書店 1968年 219-309 ページ、および同全集第20巻、273-275 ページ。『岩波茂雄への手紙』、岩波書店 2003年 246-280 ページ。『三木清研究資料集成』第1巻、クレス出版 2018年、612 ページおよび 631-632 ページ。
- 7 Vgl. Wilpert, Paul: *Leben und Schriften Ernst Hoffmanns*. In: Gadamer, Hans-Georg u. a. (hg.): *Ernst Hoffmann: Platonismus und christliche Philosophie. Gesammelte Abhandlungen und Vorträge zur Geschichte der Philosophie*. Zürich: Artemis 1960, S. 480-486.
- 8 この当時のハイデルベルク大学の講義要覧 Vorlesungsverzeichnis はオンラインで閲覧可能である (<https://www.ub.uni-heidelberg.de/helios/digi/unihdvorlesungen1784-1930.html>)。
- 9 『岩波茂雄への手紙』、248 ページ。
- 10 『読書遍歴』、414 ページ。

- 11 『読書遍歴』、400 ページ。
- 12 1923 年 8 月 24 日付の岩波宛書簡には両者の担当科目それぞれについて報告がある。『岩波茂雄への手紙』、251-252 ページ参照。
- 13 田辺元宛（1923 年 11 月 24 日）、羽仁宛（同 11 月 26 日）、岩波宛（同 12 月 3 日）の書簡で繰り返し同様の趣旨が述べられている。
- 14 『読書遍歴』、416-417 ページ。
- 15 『岩波茂雄への手紙』、247-248 ページ。
- 16 1924 年 11 月 24 日付の岩波宛書簡に「訳稿料」を受領したとある。これはホフマンの論文「ロゴスとエポス」の翻訳料だという。『岩波茂雄への手紙』、276-277 ページ参照。
- 17 『三木清全集』第 19 巻、294-295 ページ。
- 18 Vgl. Wilpert: a. a. O., S. 481.
- 19 これら 5 篇のドイツ語原典のうち、「プラトンの教説に於ける善のはたらき」は雑誌 *Logos* に掲載されたものと思われるが未確認。「プラトンとカント *Platon und Kant*」は『思想』が初出、のちに *Ernst Hoffmann: Platonismus und christliche Philosophie*. S. 428-437. に収録された。「アリストテレスの教説に於ける神の存在 *Gott und Sein in der Lehre des Aristoteles*」も『思想』が初出、同書 S. 64-77 に収録されているが、表題は *Aristoteles, das Gute, das Andere und das Ganze*. となっている。なお 1923 年 12 月 31 日付の岩波宛書簡によると、この論文はホフマンが 24 年春にハンブルクでおこなう予定の講演原稿だったという。「ロゴスとエポス *Logos und Epos*」は Hoffmann, E.: *Die Sprache und die archaische Logik*. Tübingen: Mohr 1925, S. 1-15. を訳出したもの。「プラトンに於ける形而上学的因果性 *Metaphysische Kausalität bei Platon*」は、1924 年 8 月 27 日付の羽仁宛書簡に言及があるものの未詳。
- 20 『岩波茂雄への手紙』、268-269 ページ。
- 21 この論文 *Platonismus und Mittelalter* は「ヴァールブルク文庫講演集 *Vorträge der Bibliothek Warburg*. Bd. 3 (1923/24), S. 17-82. に掲載されたものである。Vgl. *Ernst Hoffmann: Platonismus und christliche Philosophie*. S. 230-311.

Die in Heidelberg erhaltenen Briefe von Kiyoshi Miki

Kenji MITANI

Kiyoshi Miki (1897–1945), der als liberalistischer Philosoph und Kritiker von den 1920er bis zu den 1940er Jahren eine bedeutende Rolle spielte, nahm nach dem Ende des Ersten Weltkriegs ca. dreijährigen Aufenthalt in Europa, wo er bei Heinrich Rickert und Martin Heidegger studierte, mit Karl Mannheim, Karl Löwith und Hans-Georg Gadamer befreundet war. Später erinnerte er sich im autobiographischen Essay *Lesewanderjahre* seine Erfahrungen in Heidelberg, Marburg und Paris, der noch heute als ein unentbehrlicher Stoff zum Ausbildungsprozess der japanischen Intellektuellen in der *Taisho*- und *Früh-Showa*-Zeit zu lesen ist. Im Sommer 2023 wurde im Nachlass von Ernst Hoffmann die bis jetzt unbekanntenen Briefe von Miki an den Philosophiehistoriker der Universität Heidelberg entdeckt, die zu seiner Tätigkeit in Europa neue Kenntnisse herbeibringen können. Die vorliegende Arbeit stellt diese neu gefundenen Materialien vor, um sie anhand der schon veröffentlichten Briefe von Miki an den Verleger Shigeo Iwanami sowie den Geschichtswissenschaftler Goro Hani darzulegen. Damit lässt sich die sowohl wissenschaftliche als auch publizistische Vermittlungsarbeit des jungen Miki zwischen Japan und Deutschland beleuchten.